

第5節 磯浜古墳群の概要

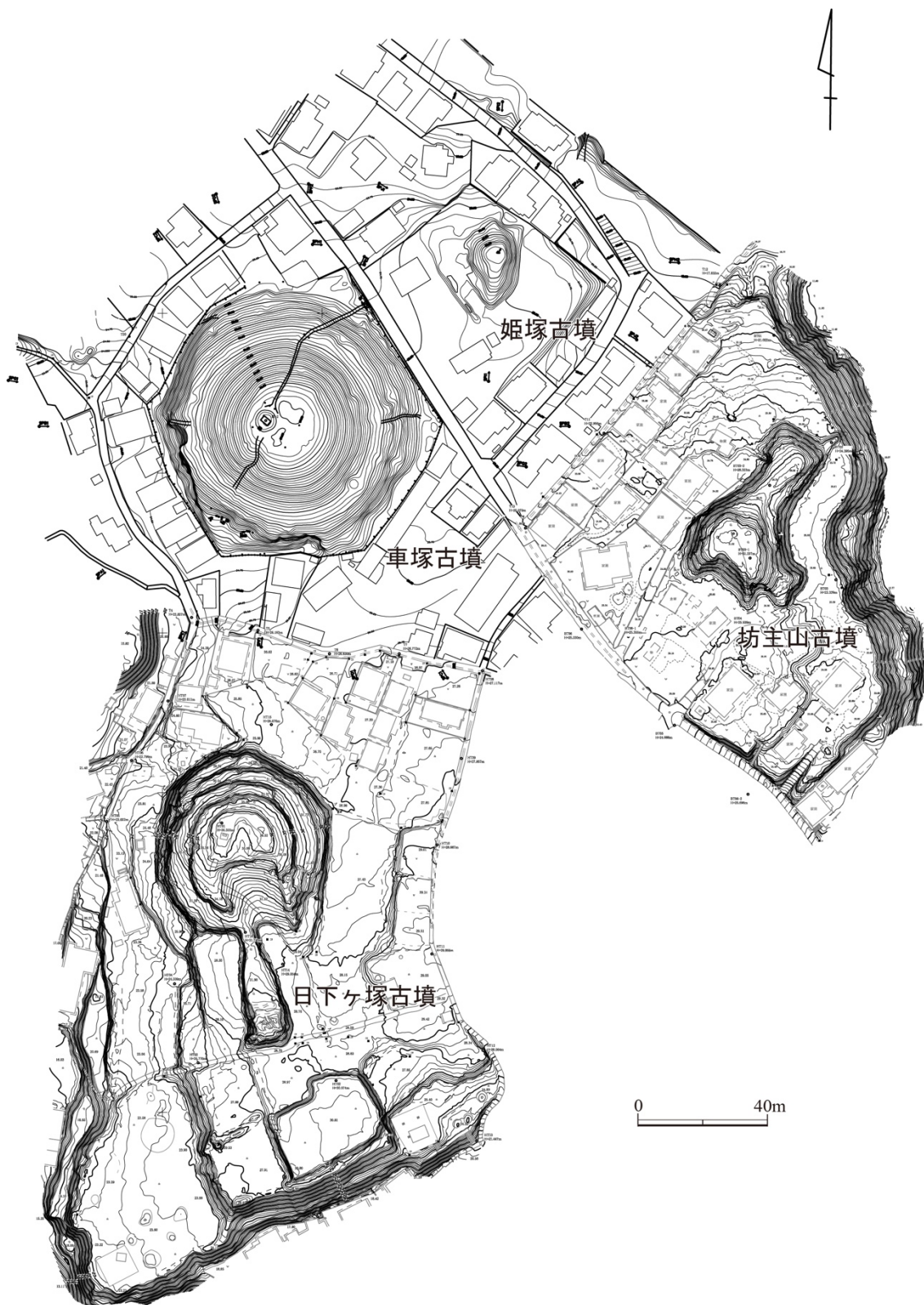


図 2-26 磯浜古墳群全体図

(1) 磯浜古墳群の概要

国指定史跡の磯浜古墳群は、茨城県中部、太平洋に注ぎ込む那珂川・潤沼川の河口から南西約2.4km、太平洋に面する鹿島台地の北端部に立地する。東茨城郡大洗町磯浜町字日下ヶ塚2865番8を含む25筆に位置する。

令和3(2020)年10月に整理した遺跡登録では、同2865番8の日下ヶ塚古墳を中心としながら、東西約365m×南北約330mの範囲に展開する。これまでに前方後円墳2基、前方後方墳1基、円墳1基、墳形不明2基の総数6基の群構成が把握されている。

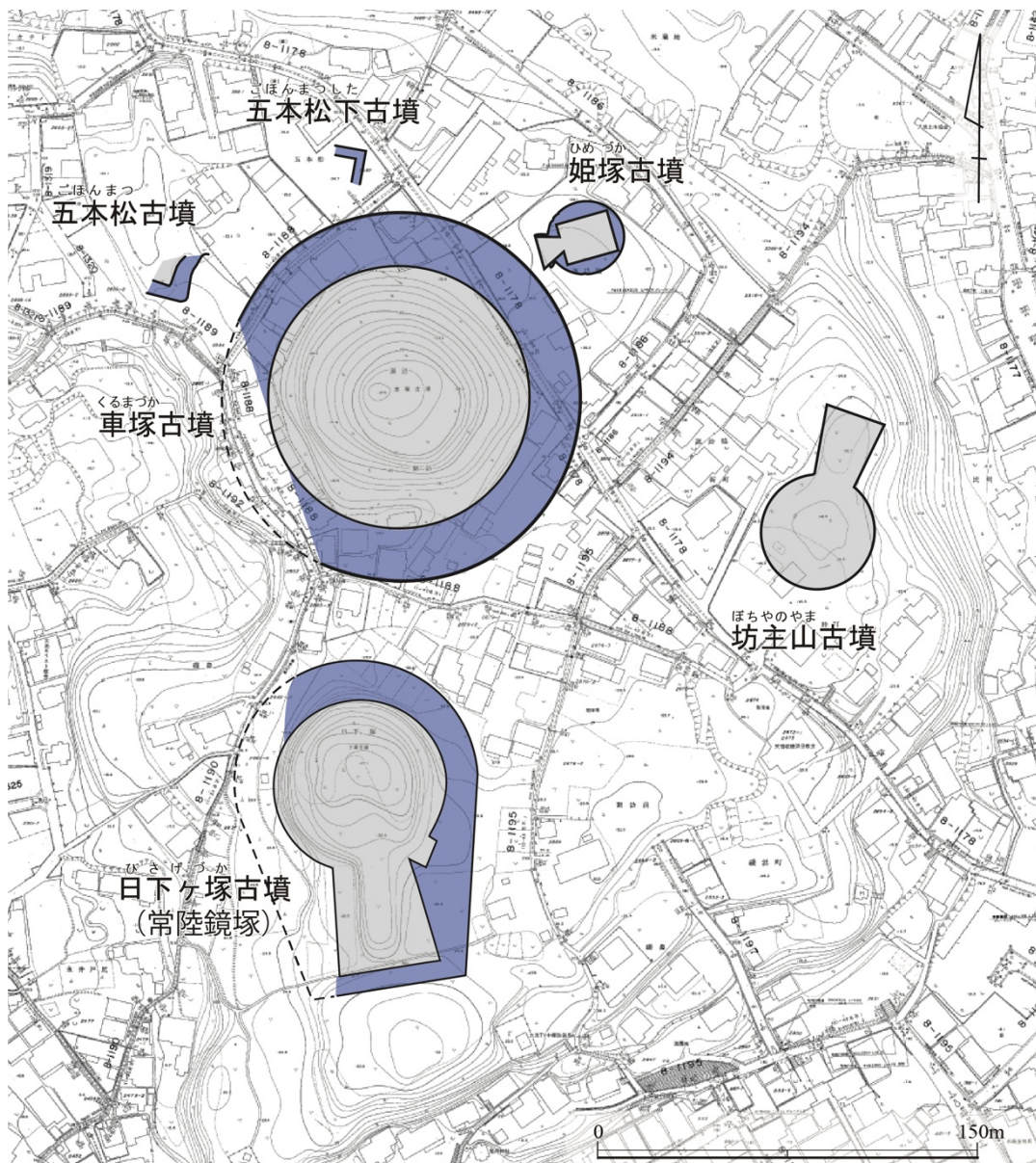


図 2-27 磯浜古墳群復元図
(出典：『続・常陸の古墳群』)

(1)-1. 姫塚古墳

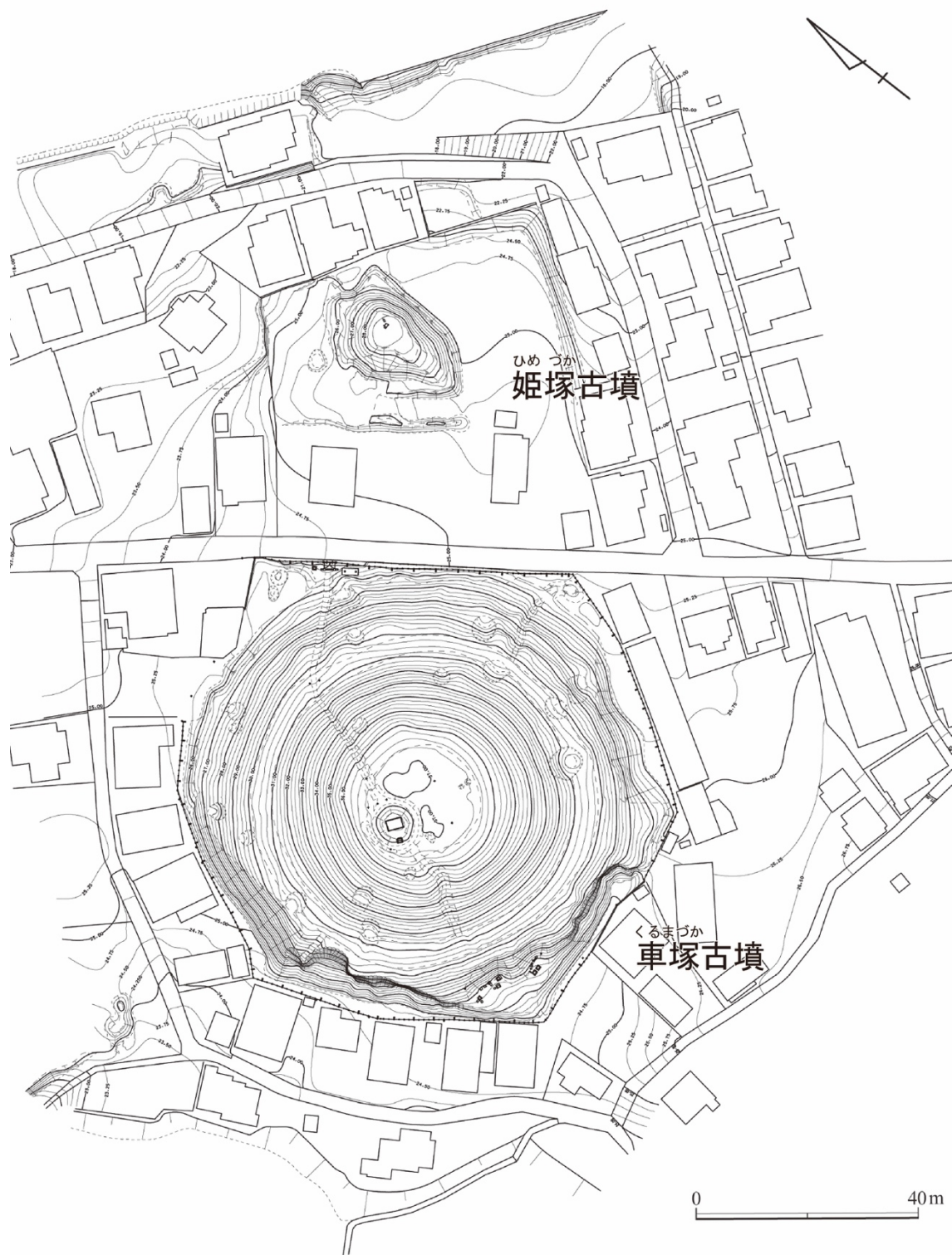


図 2-28 車塚古墳・姫塚古墳平面図

姫塚古墳について、調査成果から墳丘・周溝形態を復元してみると、図2-29の通りであり、各規模は下記の通りである。

後方部の北西隅角には近現代層が入るものの、北裾のラインは直線的であり、西裾との間の屈曲が強く、方形となるものとみられる。東裾も直線的なラインを描いている。南裾は未調査で立ち上がりは明確ではない。

周溝の外縁は各辺、弧を描いており、内縁（墳裾）が方形であるのとは異なっている。近現代の削平により、完全に削られていたり、上面が遺存せず幅を減じていたりした。

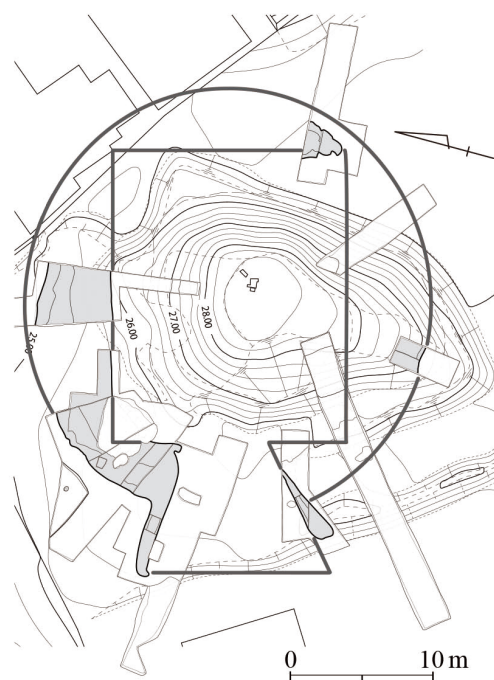
前方部はくびれ部から前端部へ向けて、大きくハの字形に開く構造である。前方くびれ部の中心線を後方部の各辺を参照し延伸すると、後方部の軸線が設定でき、結果、南北幅が予想できた。周溝の幅は南北ともほぼ共通し約6.05mである。後方部の規模は、南北約16.28m×東西約20.34mと考えられ、幅に比べ軸線が約1.25倍長い縦長の後方部を持つものと想定される。

後方部の長さ約20.34mに比べ前方部の長さは、約9.09mと、1/2にも満たない。

また、一応三方をめぐると思われる前方部

周濠の幅が1.00～1.38mと後方部周濠に比べ著しく狭小である。底面の掘り込みも後方部各辺に対し、前方部は約59cm～1.05mも浅く、区画の意識が弱い。屈曲の強い開きと共に、これら前方部が未発達である要素は、本墳の大きな特徴と言えるだろう。

以上の特徴をまとめると、1) 墳丘の全長は約29.43m。2) 後方部の平面形態は縦長の長方形を呈する。3) 後方部に比べ短めの前方部の前端は、バチ形に大きく開く。4) 前方部の周濠は、前端も含め三方をめぐるが、細く浅い掘り込みである。全長29.4m、高さ4.4mの規模を持つ前方後方墳である。前方部墳丘は削平されており遺存しないが、残された浅い周溝部はバチ形に大きく開き、弥生時代の墳丘墓からの伝統を残している。埴輪は伴わず、深く掘り込まれた後方部北周溝の内底面からは、後期弥生土器の細片と共に、墳頂部から転落したとみられる完形の小型丸底鉢が出土している。



計測部位		復元値	現存実測値
後方部	主軸長	約20.34m	約20.34m
	幅	約16.28m	約19.39m未満
	高さ	約3.49～4.42m	約3.49～4.42m
前方部	主軸長	約9.08m	約9.08m
	括れ部幅	約5.33m	—
	前端幅	約12.90m	約12.90m
	高さ	不明	0m
全長		約29.42m	約29.42m

図2-29 姫塚古墳平面図と規模

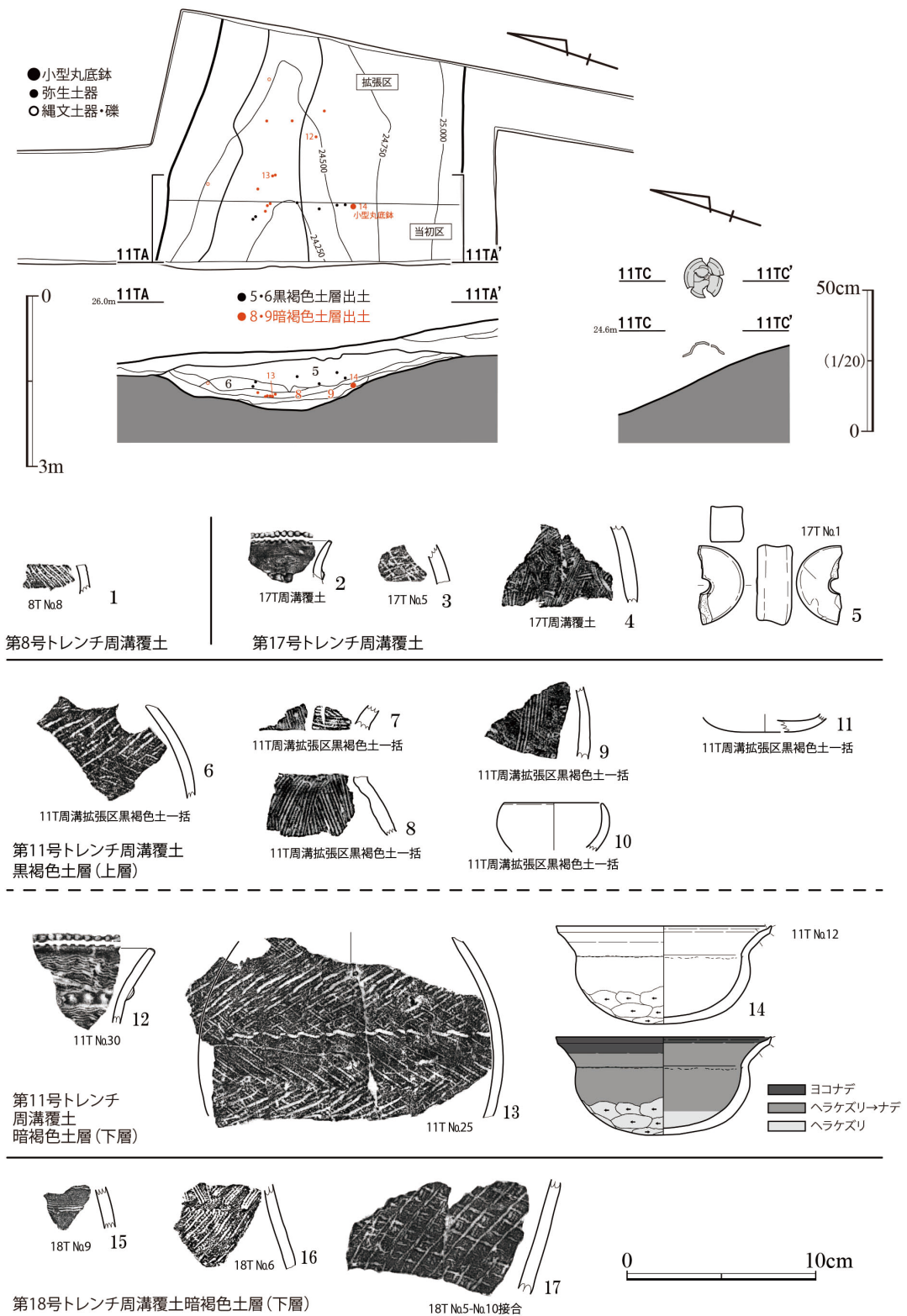


図 2-30 姫塚古墳の遺物

(1)-2. 車塚古墳

車塚古墳は、直径約 88.0m、高さ約 13.0m と、非常に大型の円墳で、南裾に造出が伴う可能性がある。周濠の幅は約 16～20m を推移し、墳丘を含めた全径では約 124.0m となる。墳丘は、これまで把握されてきた墳頂部・中段平坦面に加え、高さ約 1.2m の低い位置に埋没した下段平坦面が取り巻くことが判明したため、三段築成となる。墳頂部は非破壊の探査を含め未調査であり埋葬施設の位置や構造の解明は課題として残されている。

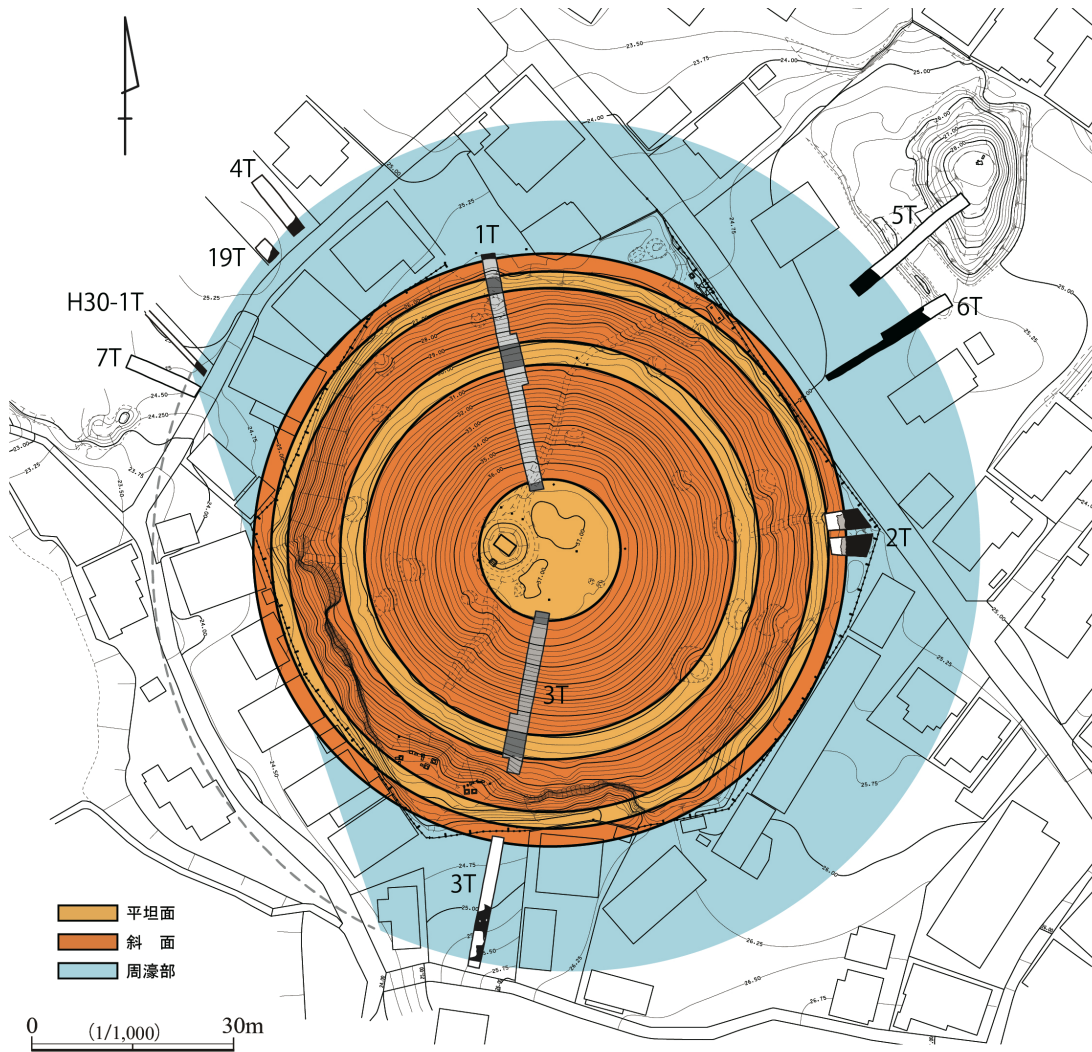
基盤の形成、及び墳丘の盛土は、下記の流れで造成された。中心部の中段平坦面以内の旧地形（直径約 61.8m、標高約 28m 台）は、墳丘の芯として掘り残し、それより周縁（60m 台～124.0m）では外周に向けて徐々に標高を下げながら掘削を進め、周濠では標高約 24.45m の粘土層に達する。墳丘の積成は、南側では中段平坦面相当の高さまで積み上げた後上段斜面を積み上げ、北側では上段斜面の積み上げを終えた後に中段平坦面より下位の寄土を行っており、南北差が見られた。

斜面には、長軸が 10cm 台後半～20cm 台前半の楕円形・隅丸長方形礫を利用した基底石上に、長軸 10cm 台の扁平な楕円礫である葺石が平らな面を上にして積み上げられている。積み上げ技法は、廣瀬分類の C 類である（廣瀬 2008）。崩落した転石を除去すると、上部斜面の基底石上に限り、葺石が二重に葺かれている状態で遺存した。南側の上部斜面には縦方向の区画石が見られた。葺石に利用された石材は、安山岩・デイサイト・砂岩が主体である。各平坦面には葺石よりも小振りな長軸約 5～9 cm、短軸 4～5 cm、厚さ約 1.5～4 cm の扁平な敷石が敷き詰められていた。岩種は葺石と同様である。

車塚古墳から出土した埴輪の構成は、朝顔形円筒埴輪・普通円筒埴輪・球形胴壺形埴輪である。普通円筒とした中に、長壺形埴輪も含まれる可能性はあるが、破片の状態では明確にはしえなかった。ここでは一括して普通円筒として報告しておく。

墳頂部・中段・下段平坦面の外縁には、それぞれに円筒埴輪が樹立されているが、基底部から 2 段目を残すのみで、上半分の形態については、朝顔形であるのか、普通円筒であるのか、未定であり、配列についてもよく分からなかった。ただし、北側の墳頂部平坦面由来の転倒埴輪二個体は、共に朝顔形円筒埴輪であり、墳頂部をめぐる埴輪列の様相の一端を示している。その一方で、南北とも墳頂部・中段平坦面からは普通円筒埴輪片も出土しており、朝顔形と混在し配列されたものとみられる。

図 2-32 の 1 の朝顔形円筒埴輪は、高さ約 98.8cm、底径約 30.7cm である。基底部はややハの字形に開き安定感がある。4 条 5 段で、1～3 段目が直立的で各段均一な幅を持つ胴部、4 段がやや張りのある肩部、5 段が有段の口辺部である。2・3 段目に 2 個一対の縦長方形の透かし孔が縦に並ぶ。4 段の内面を除き、内外面ともハケメが顕著である。形態的特徴は、岐阜県^{ひるいおおつか}昼飯大塚古墳（中井ほか 2003）や山口県^{わないちゅうすやま}柳井茶白山古墳（置田ほか 1999）などに類例が報告されており、この時期の典型的な朝顔形円筒埴輪の一例と言える。



第111図 車塚古墳復元図

第15表 車塚古墳の規模

計測部位	復元値
周濠を含む全径/周濠幅	約124.0m/約16~20m
直径(下段斜面径)	約88.0m
下段平坦面径/幅	約82.2m/約2.35m
中段斜面径	約77.3m
中段平坦面径/幅	約61.8m/約3.5~3.7m
上段斜面径	約54.7m
墳頂部平坦面径	約20.8m
高さ	約13.0m
上段斜面高/傾斜角度	約6.2m/22.5度
中段斜面高/傾斜角度	約3.4m/24.0度
下段斜面高/傾斜角度	約1.2m/22.5度

図 2-31 車塚古墳復元図と規模

(出典：『磯浜古墳群 I』)

図 2-32 の 2 の普通円筒埴輪は、頸部に一条の突帯がめぐり、胴部は直線的である。胴部突帯や透孔との接合部位が無いので、普通円筒であるのかは吟味が必要である。むしろ口辺部の外反具合や胴部のエンタシス状の張りなど注視すれば、日下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳で出土している長壺形埴輪 1 類からの系統とも考えることができる。墳頂部・中段平坦面とも破片資料は出ているが、長壺・普通円筒相互を識別できる遺存状態ではないため、今後に残された課題として残ることとなる。

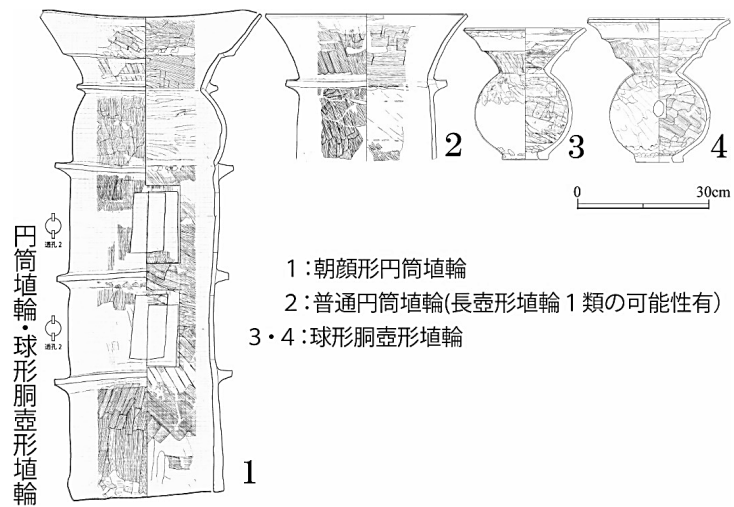


図 2-32 車塚古墳の埴輪
(出典：『続・常陸の古墳群』)

図 2-32 の 3・4 の球形胴壺形埴輪は、南側の中段平坦面、しかも内側に偏在して濃集されており、樹立される円筒埴輪とは、その性格が異なる出土状態を示している。直上の南側墳頂部平坦面や上段斜面に転倒を示すような痕跡が見られず、なおかつ中段平坦面に残された各個体の遺存状態の良さからすれば、元々中段平坦面の内側に沿って配置され、埴輪祭祀が執行されたものと見た方が良さそうである。

口辺部から胴下部まで比較的均一な厚みを有しており、器厚は 9～10mm 前後である。胴部内面にハケメを施すのが常態である。日下ヶ塚古墳例と比較した場合、日下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳例は 5～7mm 前後と薄くしかも個体内の厚薄が部位によって変化する傾向がある。より厚みを持ち均一な仕様の車塚古墳例とでは、明らかに型式学的に異なるものと識別できる。また、日下ヶ塚古墳例は、胴部内面の調整はほとんどがナデのまま残し、仮にハケメを入れたとしても胴下部など部位は限定的である。相互間は、後ほど詳述するが、前後の時期の類例も加味して吟味すると、年代差を示しているものと見て良いだろう。日下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳例が古く、車塚古墳例を新しく考えることができる。

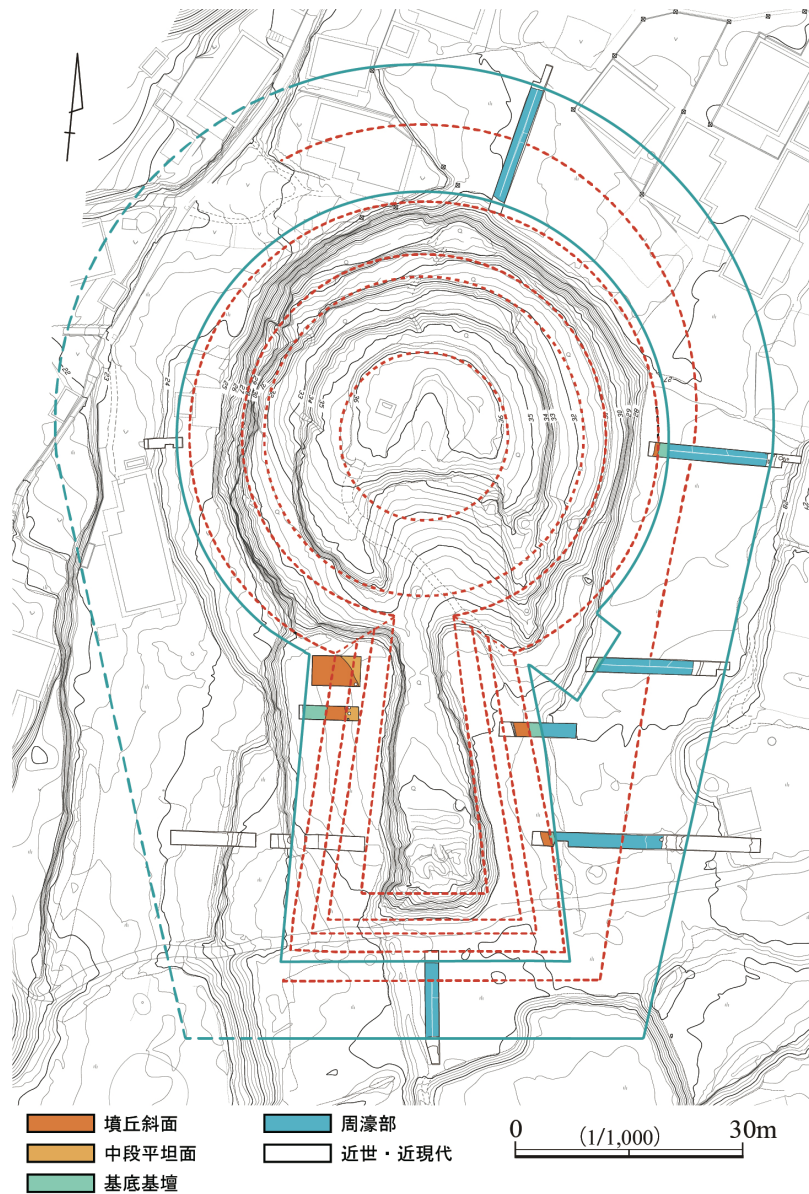
(1)-3. 日下ヶ塚古墳

日下ヶ塚古墳は、ほぼ南北軸で、前方部が南側の鹿島灘に臨んでいる。墳丘を取り巻くように、北・東・南側をめぐる周濠部を検出し、その平面形態は南側の窄まる盾形となるものとみられる。現況で計測すると、その幅は約 7.4～15.6m で、南北周濠部を含めた古墳の復元された総長は、約 128.2m である。他方で、西側は周濠部の存在が確認できず、地山を削り出している事が確認された。各周濠部の上面は近世の海防陣屋による土地利用や近現代の農地造成により削平を受け、幅が狭くなっているものと考えられる。

南側の前方部前端は確認できたが、北側の後円部墳裾は近現代の削平を受けており、明確ではない。北側の復元された周濠部内縁で計測すると、墳丘全長は約101.4mである。

後円部の直径は、第6号トレンチで確認された基底基壇と周濠とが接続する位置を墳裾とし^{注1}、墳頂部平坦面や粘土槨の位置も考慮し正円形で復元すると約64.8mと想定される。後円部の高さは、第6号トレンチで検出した墳裾との比高で約10.1mである。後円部墳丘の構造については、平成24年時は未調査のため、明確では無いものの、昭和24年の調査成果と平成22年度の測量調査成果を加味し、幾つかの可能性を指摘しておきたい。

後円部の墳頂部平坦面については、標高36m付近の直径約22.1mの範囲と想定できる。この平坦面の縁辺からは、昭和23



計測部位		復元値	現存実測値
後円部	直径	約64.8m	約60.7m
	高さ	約10.1m	約9.3m
前方部	長さ	約36.6m	約35.7m
	括れ部幅	約23.5m	約7.0m
	前端幅	約38.0m	約18.5m
	高さ	約4.7m	約3.6m
	全長	約101.4m	約96.4m
	総長	約128.2m	—

図 2-34 日下ヶ塚古墳復元図・規模

～24年には、埴輪列も把握されている（大場・佐野 1956）。また、昭和40年代頃の田中新史による踏査によっても、この墳頂部平坦面の縁辺より長壺形埴輪や図2-41の2の4単位の縦長方形透孔を持つ円筒埴輪などが採集されてきた（田中・白井 2008）ので、埴輪樹立を伴う墳頂部平坦面の存在は確かであろう。

後円部墳丘は戦争前後の開墾により斜面が切り崩され農地として利用されてきた経緯があるため、古来造成された平坦面を区別するのは容易なことではない。段数を含め明確ではないが、唯一前方部墳頂部平坦面の標高と重なる標高約31～32mの平坦部が注視される。所々切り崩され残らないものの、東西の一部では比較的形状を保っている。この平坦面を仮に後円部の中段平坦面と呼ぶが、これより下位の標高約28～29m付近にも、前方部の中段平坦面から連続する後円部の下段平坦面が埋没している可能性がある。後円部東裾からは図2-39右下の8・9の円筒埴輪の基底部が採集されており、こうした中～下段平坦面から転倒した資料と考えられるだろう。中・下段平坦面については、存否を含め、今後その構造を明らかにしていく必要がある。

前方部の規模は、同じく基底基壇の外縁を墳丘裾部とみると^{注1)}、長さ推定約36.6m、括れ部の幅約23.5m、前端部の幅約38.0mとなる。高さは、第2号トレンチの墳裾との比高で約4.7mである。これらの数値は、現況の前方部の遺存状態も加味し、西括れ部及び三方の墳裾の調査成果に基づき想定されるものである。前方部の構造は、墳頂部平坦面、上段斜面、中段平坦面、下段斜面より構成される二段築成である。東西の裾部には、埴輪樹立の見られない基底基壇が伴うが、前端にも伴うものとみて復元した。上段斜面と中段平坦面は、西括れ部付近を除いて三方ともほとんど遺存してない。これは江戸時代後期に進められた同地の磯浜海防陣屋の造成によるものと考えられている。西括れ部付近の中段平坦面の標高は約28.3～28.5mである。

基底基壇は、後円部の東裾と、前方部の東西裾から検出した。第8号トレンチから検出した基底基壇の位置は、復元後円部裾からは大きく外れており、造出等の付属施設が伴う可能性がある。南側の前方部東裾の標27.86mから北側へ向けて漸移的に下降し、後円部東裾では約1.42m下がり約26.44mである。これは地表面の高さともほぼ連動したものである。前方～括れ部における西裾（26.63～27.09m）・東裾（26.75～27.54m）間で、同一レベルを保っている。基壇の幅は、東側では0.70～1.72mと狭いが、西側では3.26mと広い。東西括れ部付近では、地山を平坦に削り出した後、暗褐色土やローム土を張り、突き固めて整形している。

上記の通り、墳丘復元を行った日下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳について、その形態の系譜について、築造規格を見ておきたい。平面的な形態的特徴がある程度似た前期中葉～後半段階の200m超の畿内の大王墓等と畿外の100m超級の首長墓に求めたのが、図2-35である。

1の奈良県^{しづたにむこうやま}渋谷向山古墳と2の佐紀^{さきみさきぎやま}陵山古墳とは、相前後する時期に築造されており、概ね日下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳とも重なる時期と見られる古墳である。両例スケール1/5,000図に日下ヶ塚古墳復元図をスケールアップして全長が合うように任意の縮尺で重ねたのが赤いラインである。渋谷向山古墳は、前方部の形態は良く対応するが、後円部径：前方部長の比率がうまく合わない。規格としてはうまく対応しないのではないかとみられる。一方の

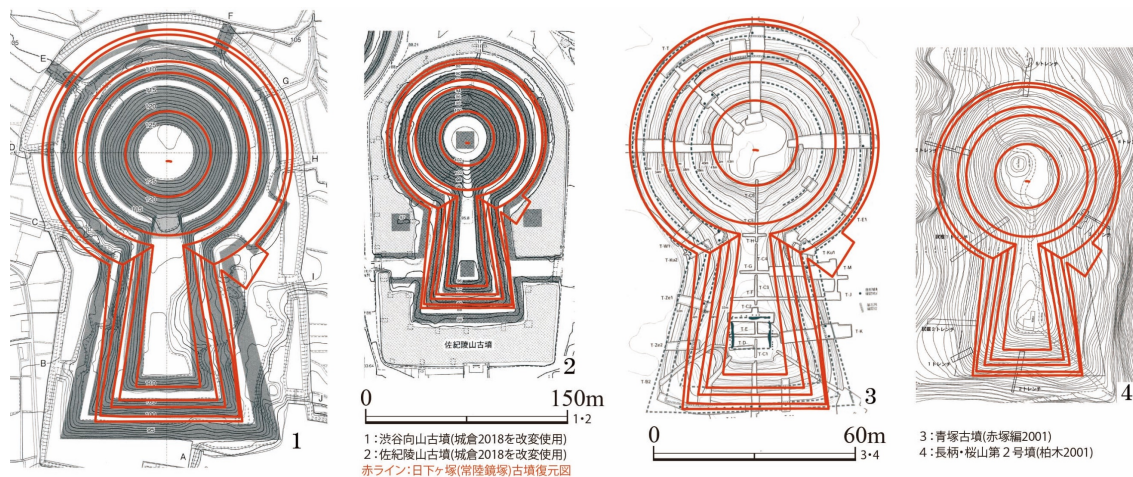


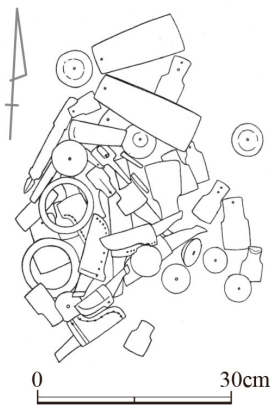
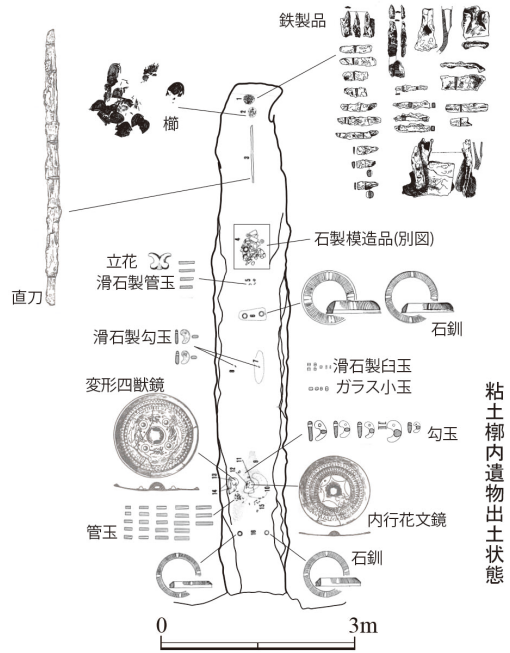
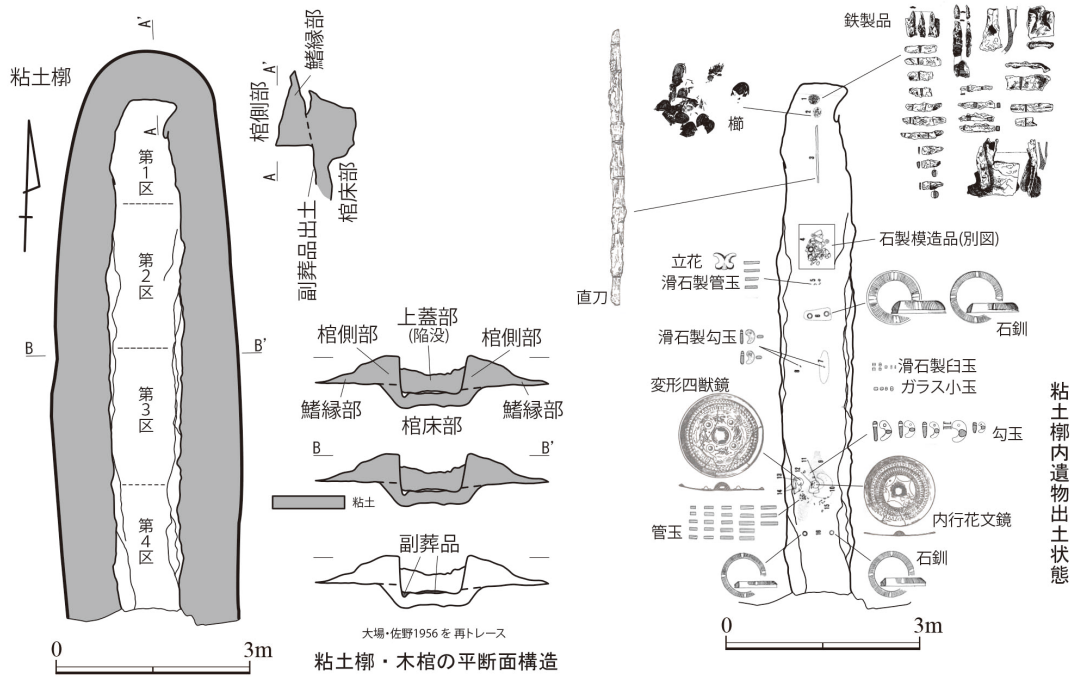
図 2-35 日下ヶ塚古墳と大王墓・首長墓との比較 (出典：『磯浜古墳群Ⅰ』)

佐紀陵山古墳は、後円部径：前方部長の比率が日下ヶ塚古墳と概ね一致する。ただし、前方部墳頂部平坦面の前端の開きが佐紀陵山古墳は狭く、日下ヶ塚古墳の方が広い。それでも墳裾の隅角は概ね揃うから、全体のシルエットは大変似た印象を受けるだろう。

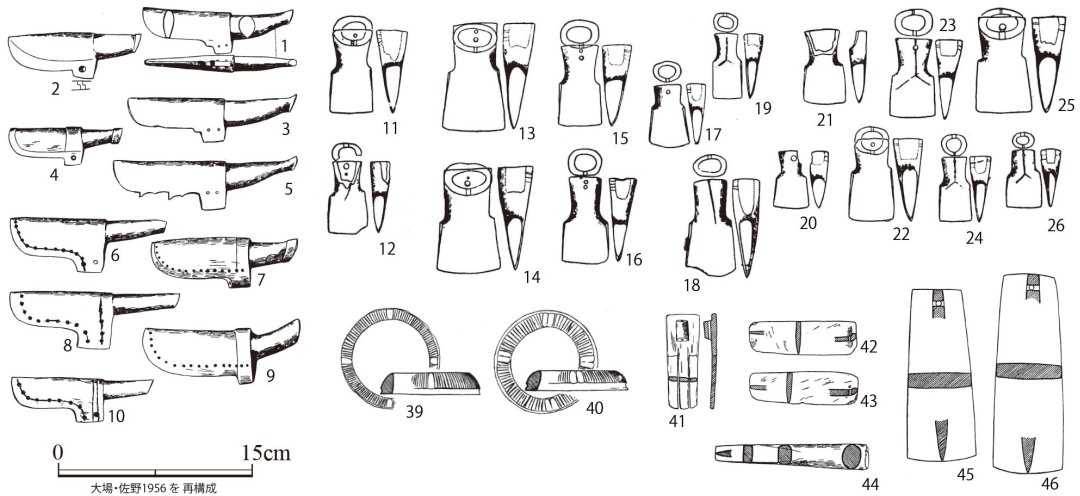
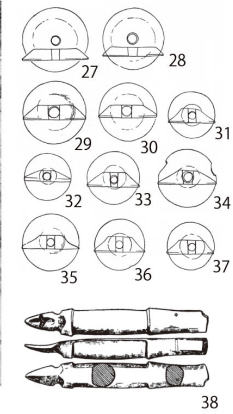
3は、愛知県犬山市の^{あおつみ}青塚古墳である。後円部径と前方部長との比率は日下ヶ塚古墳と良く合うが、前方部前端の幅が青塚古墳は広い。この形態は西殿塚古墳の規格と似ており、日下ヶ塚古墳とはこの部分がうまく合わない。4の神奈川県逗子市・葉山町の^{ながえ}長柄・^{さくらやま}桜山第2号墳は、狭長な前方部を持つ同時期の第1号墳に比べれば、前方部墳頂部平坦面の開き方は、日下ヶ塚古墳に似ている。しかし、括れ部位置や前方部の幅など相容れない要素も多い。本例は尾根上稜線に所在する制約があるのかもしれない。

これらの古墳と相前後する時期とみられる五社神古墳や宝塚1号墳なども検討したが、規格がまったく合わないので、図化していない。以上よりして、畿内外の大王墓・首長墓としては、佐紀陵山古墳が非常に近い規格であることが理解でき、日下ヶ塚(常陸鏡塚)古墳の築造に際して、規格を模した可能性が十分にあるであろう。その一方で似た時期、規模、性格を持つ首長墓でも、必ずしも規格が合う訳ではないことも理解できた。

昭和24年8月、國學院大學の大場磐雄博士により、「常陸鏡塚」の名称で、埋葬施設を中心とした墳頂平坦面の発掘調査が実施された。後円部墳頂より長さ8.95mと長大な粘土槨が検出され、腐食して残っていないが木槨が伴ったものと考えられる。槨には、遺体のほか、内行花文鏡・変形四獣鏡、直刀、鉄製の模造品、石釧や刀子形を含む農工具形の石製模造品類、滑石製白玉、勾玉、管玉、ガラス製小玉、木製の櫛などの4,000点の豊富な葬品が副葬されていた。遺骸は、棺南側の内行花文鏡付近から見つかった壮年性別不明の一体分であり、枕状の川原石、その周りに偏る朱、一对の石釧など、埋葬の状態を予測できる出土状態にある。その他に、約3.4m北に寄った位置からも一对の石釧の北側に「異形品」と報告された祖型の^{りっか}立花が出土しており、もう一体の遺骸を伴った、複数埋葬の可能性がある(深澤2019)。



石製模造品出土状態 (東から撮影)



1~10: 刀子 11~26: 斧 27~37: 紡錘車 38: 鉈 39・40: 石劔 41: 鋤先 42・43: 鎌 44: 鑿 45・46: 短冊形斧

図 2-36 日下ヶ塚古墳の粘土槨と副葬品

(出典: 『磯浜古墳群 I』)

副葬品の内、石製模造品、特に刀子形石製模造品については、奈良県奈良市北部の日本最大の円墳である前期末葉の富雄丸山古墳（109m）の埋葬施設出土例と、形態・石材・製作技法ともよく似た類品として知られている。佐紀陵山古墳との墳丘形態の類似も考慮すると、日下ヶ塚古墳の成立の背景に、奈良県奈良市北部の勢力との関係が少なくないものとみられる。

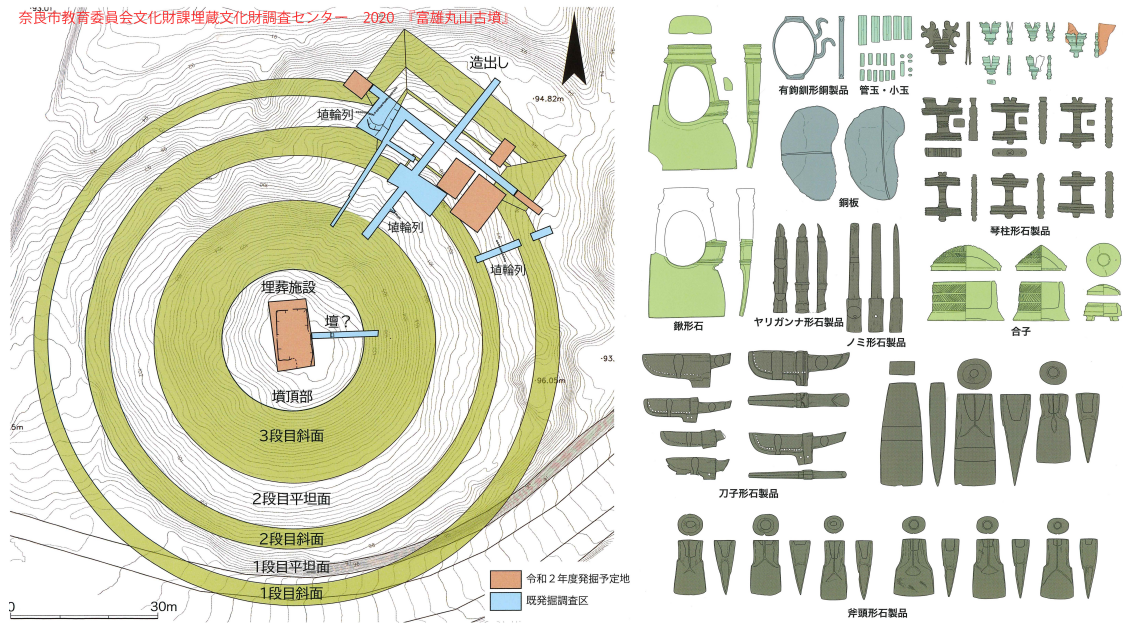


図 2-37 富雄丸山古墳と副葬品（出典：『富雄丸山古墳』）

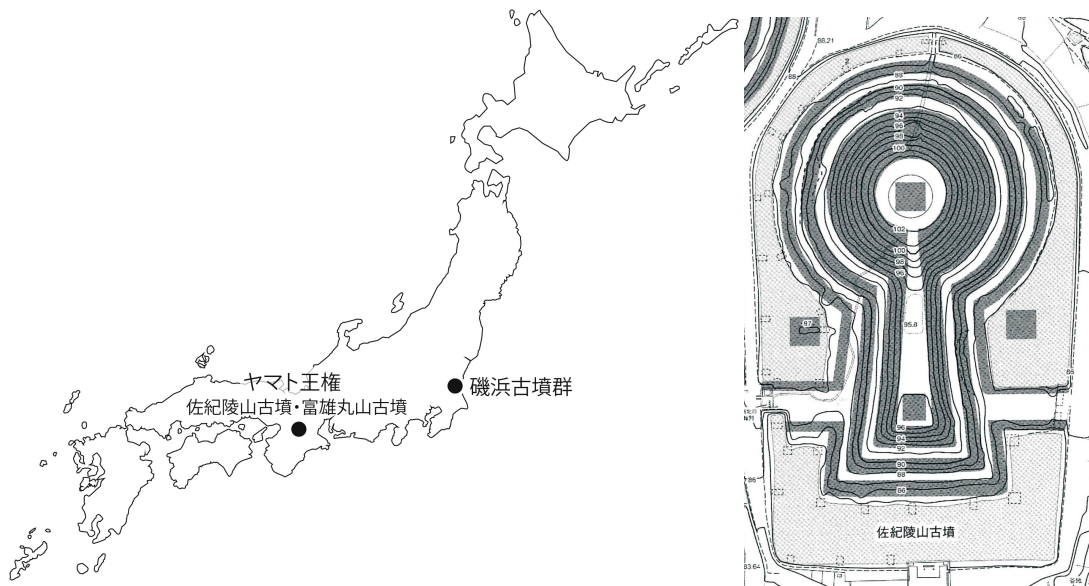


図 2-38 奈良県奈良市北部勢力（右図出典：『玉手山1号墳の研究』）

日下ヶ塚古墳から出土する埴輪は、図 2-39 に図示した通り、長壺形埴輪・円筒埴輪・球形胴壺形埴輪から構成される。

長壺形埴輪 長壺形埴輪は、図 2-40 の 4・5 上出島 2 号墳例や同図 6～8 長柄・桜山第 1 号墳例のように頸部を伸ばす長頸化する場合と、同図 9～21 のように胴部が長くなる長胴化を示す場合とがある。こうした資料を考える場合、同一古墳で組成する中で、長い筒状の円筒埴輪から影響を受け、高さを揃えるために、壺形埴輪の胴部や頸部が伸長化するという考えがある(廣瀬 2015)。高さを揃えることに目的があるとすれば、頸部や胴部の差異に注目する名称はそぐわないとも言え、ここでは、あえて長壺形埴輪と呼び長壺などと双方を一括して用いるものとする。

日下ヶ塚古墳の長壺形埴輪は、基底部径は約 17～21cm で、胴部はやや外傾して立ち上がり、中位あるいは上部に張りを持つ共通点がある。口辺部における段部の単複、頸部における突帯の有無や縮約、胴部における張りの形態的特徴により、形式的に下記の三種類に分けて考えることができる。

日下ヶ塚長壺形埴輪 1 類: 単口縁+頸部突帯+エンタシス状に極端に長胴化する胴部

図 2-39 左 1 の日下ヶ塚(常陸鏡塚)古墳第 10 号トレンチ例と、図 2-41 の 3 髭釜遺跡第 4 号方形周溝墓例とでは、高さ約 71cm×口径約 45cm と、高さ約 84cm×口径約 51cm と規模に違いがあるが、相互の胎土・形態・ハケメの特徴は似ており、背景にある生産体制は共通の基盤に拠ったものと考えて良さそうである。しかしながら、前者は墳墓への樹立、後者は白玉 34 点の副葬品が伴う埴輪棺として利用されており(藤井 1976, 井 2009)、利用目

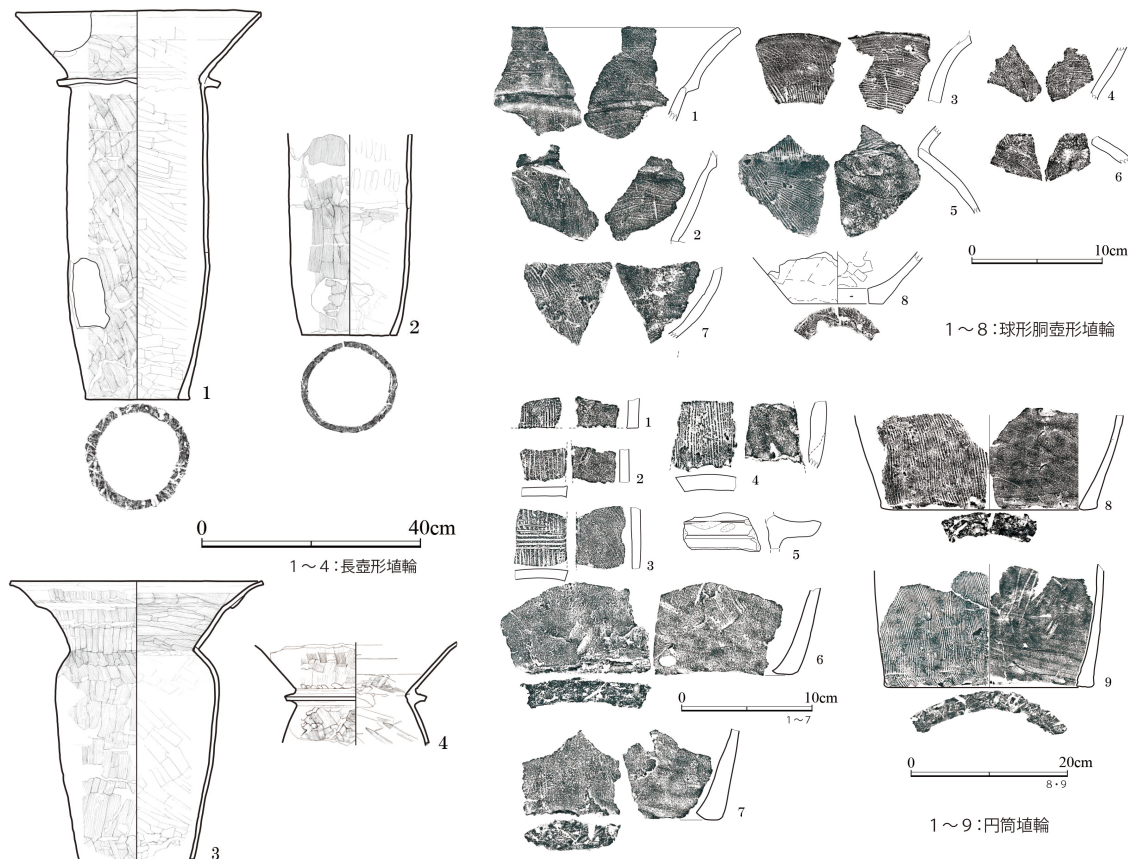


図 2-39 日下ヶ塚古墳出土埴輪 (出典:『磯浜古墳群 I』)

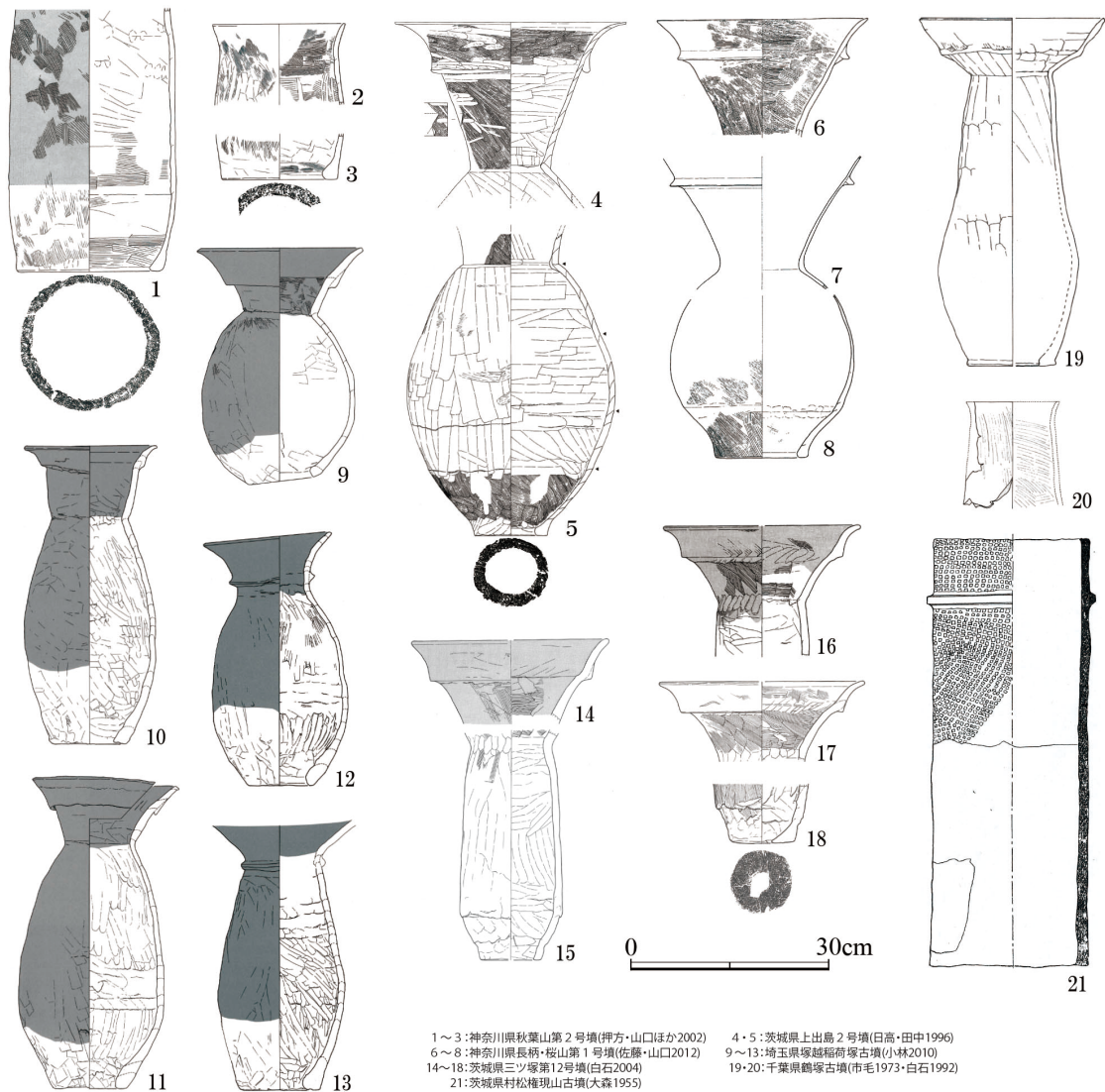
的が異なっている。サイズの差は、用途を意識した作り分けが行われたものと見られる。最大の形態的特徴は、微弱ではあるが中張りのエンタシス状の長胴化した胴部である。

日下ヶ塚長壺形埴輪2類：単口縁+頸部突帯+胴中位に最大径を持ち長胴化する胴部

図2-39左4の日下ヶ塚古墳第6号トレンチ例が該当する。突帯を含まない頸部の直径が約21.6cmと、1類の約24.4cmに比べ小さな作りである。胴部の張りは中位にあり、直径27cm程度と1類の約26cmよりも膨らむ。頸部が縮約するのと、胴中位が張るのとは連動するものとみられる。器高は不明である。

日下ヶ塚長壺形埴輪3類：複合口縁+頸部無突帯+胴上部に最大径を持ち長胴化する胴部

図2-39左の3第7号トレンチ例などが該当する。口辺部は複合口縁となり、直径約46.4cmと大きく開く。頸部は鋭角に強く外屈する。肩部と呼んでも良い位置に強い張りを持つ上張りの胴部が特徴的である。



1～3：神奈川県秋葉山第2号墳(押方・山口ほか2002) 4・5：茨城県上出島2号墳(白高・田中1996)
 6～8：神奈川県長柄・桜山第1号墳(佐藤・山口2012) 9～13：埼玉県塚越稲荷塚古墳(小林2010)
 14～18：茨城県三ツ塚第12号墳(白石2004) 19・20：千葉県鶴塚古墳(市毛1973・白石1992)
 21：茨城県村松権現山古墳(大森1955)

図2-40 日下ヶ塚古墳埴輪の類例 (出典：『磯浜古墳群Ⅰ』)

図2-40に日下ヶ塚長壺形埴輪1～3類の類例を図示した。30cm台後半～60cm台前半を推移する、所謂長頸長胴壺に比べ、日下ヶ塚古墳の全形をうかがえる資料の器高は約71cmと一際大きく、4の上出島2号墳例のような頸部の伸長は見られないのに対し胴部が著しく発達するのが、最大の特徴と言える。

日下ヶ塚長壺形埴輪1類の系統は、図2-40の1～3の前期前半、^{あまぎやま}秋葉山第2号墳例が注

視される。全形をうかがえる資料は無いが、1の胴部にみられるエンタシス状の張り、基底部の肥厚などは、良く似ている。ただし、頸部の突帯は見られないので、厳密には別系統である。日下ヶ塚古墳例以後の系譜としては、器面調整にタタキ目と異質ではあるが、同じく常陸沿海部の同図21の^{むらまつてんげんやま}村松権現山古墳例の器形に引き継がれるものと見られ、中期前葉までは変容を遂げた長壺形埴輪の系譜を追うことができる。

日下ヶ塚長壺形埴輪2類の系譜は、同図12・13の塚越稲荷塚古墳例に繋がる。単口縁で頸部に一条の突帯を持ち胴中位～下位に張りを持つ。両例とも、日下ヶ塚古墳6号トレンチ例に比べると、シャープさを失い器厚も厚くなり鈍重な印象を与える。種々の特徴は日下ヶ塚長壺形埴輪3類の三ツ塚12号墳例と重なる中期前葉と見て良いだろう。

日下ヶ塚長壺形埴輪3類は、胴部の張りが上張りの例は乏しいが、中張りから下張りの例としては、日下ヶ塚古墳例とほぼ同時期の図2-40の4・5上出島2号墳例が古く、同図10・11の塚越稲荷塚例、14～18の三ツ塚12号墳例、19の鶴塚古墳例など、器が厚ぼったくなつた中期前葉に多くの類例が確認されている。

円筒埴輪 図2-39右下1～9に図示した通り、破片資料がほとんどで、透孔の存在や直径の大きさなどから同定したものであり、その形態的特徴は明確ではない。特に口辺部が朝顔形に開くのか、あるいは普通円筒であるのか、はっきりしていないのが実情である。そのような中で、図2-41の2の後円部の墳頂部平坦面から採集された資料は、2段目に縦長長方形の透孔を4単位廻らすことが報告されており重要である。基底部が窄まる特徴も図2-39右下8・9の採集資料にも見られる点であり、本墳の円筒埴輪の特徴と言えるだろう。先の長

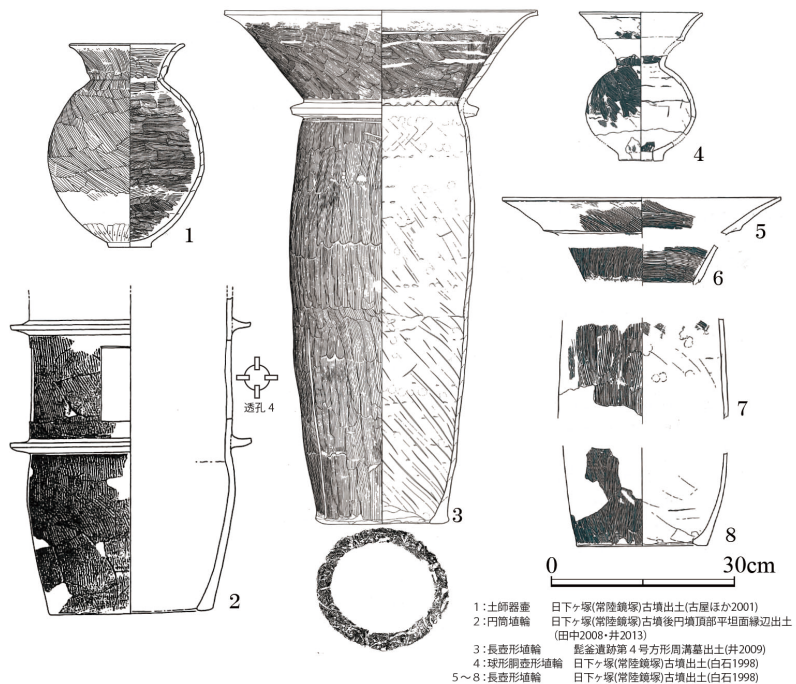


図2-41 日下ヶ塚古墳出土土器・埴輪

(出典：『磯浜古墳群Ⅰ』)

壺形埴輪と同様の製作技法であり、相互に関連しながら製作が進められた経緯を予測させる。

球形胴壺形埴輪 図2-41の4は、かつて車塚古墳採集と報告された、全形の分かる球形胴壺形埴輪である。しかしながらその後増加した資料を含め実見して検討した結果、日下ヶ塚古墳出土のものとして良いことが分かってきた。この点は、既に指摘がある内容を追認するものとなっており(田中・白井2008)、今後は日下ヶ塚古墳出土品に含めて考えることにする。

図2-39右上1~8に球形胴壺形埴輪の破片資料を図化した。頸部からの立ち上がりには、図2-41の4・図2-39の1・3・5のように外反するものと、図2-39の2・4のように内湾するものの別がある。底部は、図2-41の4の外面の立ち上がりが直立的なものと、図2-398のように外傾して胴下部へ連続的なものの別が確認できる既報告資料を見ても、この二者が含まれており(小宮山2002, 井・小宮山2008)、相互が一定量含まれるのであろう。

埴輪配列 前方部の中段平坦面に樹立状態にあったもの、転倒し基底基壇上や周濠内に落ち込んだものなどが確認できた。

まとめると、図2-42の通りである。

前方部では、円筒埴輪や球形胴壺形埴輪に比べると、圧倒的に長壺形埴輪の割合が多い。中段平坦面には樹立状態の長壺1類の基底部、長壺3類の頸部などが確認できた。またこの段から基底基壇への落ち込んだ資料では、同様に長壺1類と3類が把握されている。一部前端部周濠内では円筒埴輪の基底部片の包含が見られたが、その他の資料では長壺3類が優勢である。墳頂部平坦面前端の南東側の隅角では、長壺の胴下~基底部の大型破片が採集されており、この位置に樹立されたものと考えて良いだろう。確かな所では、前方部に関しては墳頂部も中段も長壺1・3類が優勢であったと言える。球形胴壺は断片的な出土ではあるが、括れ部~前方

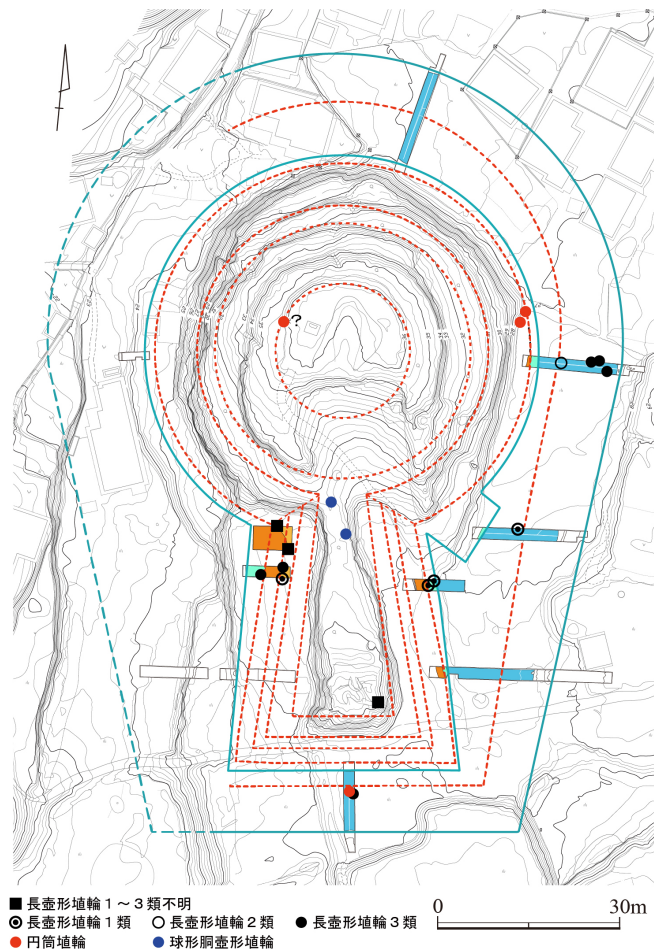


図2-42 日下ヶ塚古墳の埴輪配列

(出典：『磯浜古墳群Ⅰ』)

部の墳頂部平坦面からの出土が特徴的である。

後円部に関しては、情報が少ないが、東周濠内の墳丘側から長壺2類が出土した。田中新史による墳頂部崖面、稲田健一による東裾からのそれぞれ大型破片の表面採集成果から、墳頂部及び中段平坦面は、円筒埴輪が優勢である可能性が考えられる。

一つ注視したいのは、東周濠外側から長壺3類がまとまって出土している点である。この地点の浅い位置は近現代の耕作により遺存状態が良くないが、東縁に長壺3類を並べた外堤が廻った可能性も視野に入れる必要があるだろう。

注1) 後円部・前方部における墳裾の位置を、基底基壇の外縁に求める考えと、周濠内底面の下端に求める考えがあるため、双方のラインを第105図に併記してある。本文中における墳裾の説明は前者を採用している。

(1)-4. 坊主山古墳

令和2年1～3月に測量調査を実施。その成果に基づき、同年7～11月、範囲確認調査を実施した。前方部は前端を含む三方に周濠がめぐることが確認できたが、後円部は、斜面・裾部・周濠部とも削平を受け、明確な形態を把握しづらかった。また、後円部の東側に近世～近代に造成された張り出し部(5T上付近)が伴い、複雑な形態をしている。この張り出し部でバックされた墳丘東斜面の遺存状態が良かったため、東側の墳頂平坦面の外

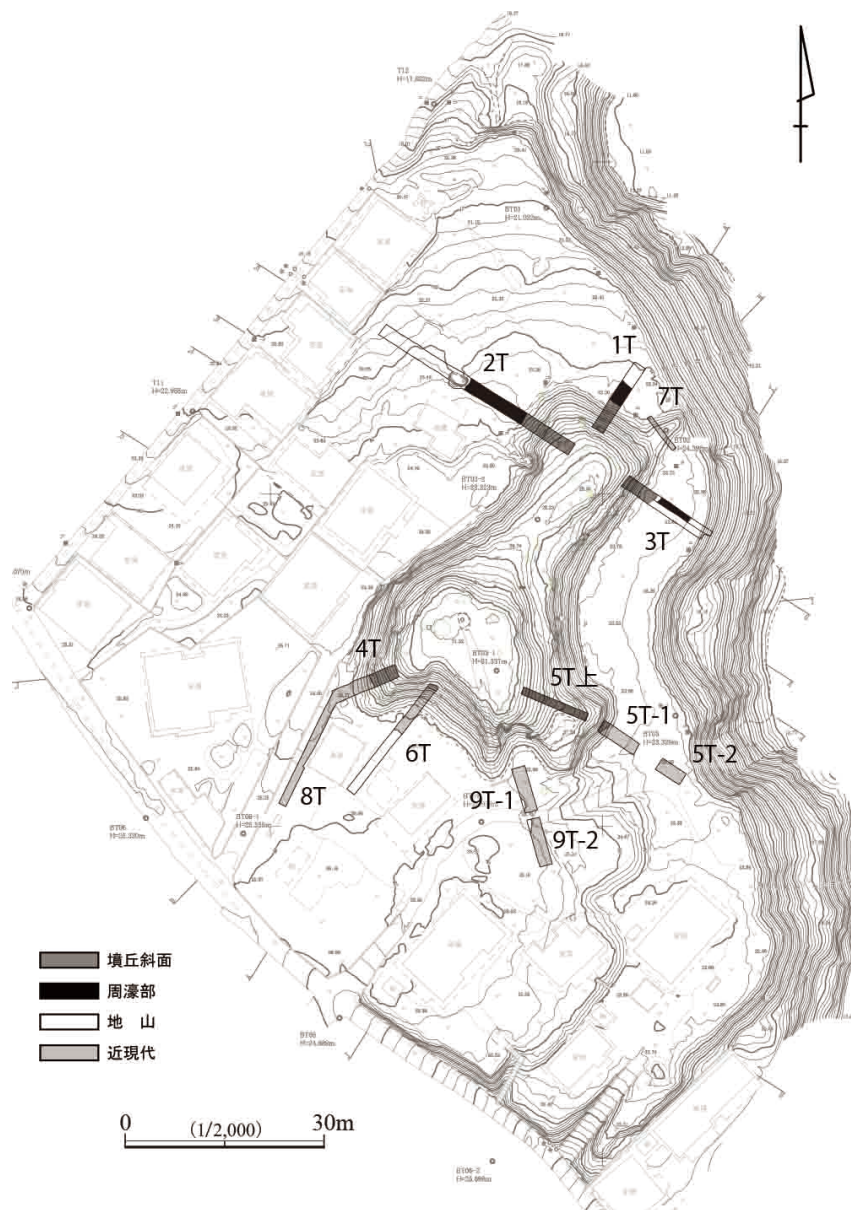


図 2-43 坊主山古墳平面図

縁の円弧を描くラインが後円部と考えると差し支えないものとみられる。前方後円墳の現況全長は約 60.0mであるが、斜面が削平を受け限界が確認できていないため、規模はもっと大きくなるものとみられる。高さは南西側では約 5.6mで、前方部墳頂は後円部墳頂に比べ約 2.8m低く平坦で前期古墳の特徴を有する。前方部・後円部とも斜面における平坦面が確認されておらず、中段のテラスは伴わないものとみられる。

埴輪は、分布に偏りがみられる。前方部の墳丘や周濠内からはほぼ出土していないため、前方部墳頂に樹立したとは考えにくく、配置があったとしても希薄であったものとみられる。一方の後円部の墳頂や斜面の覆土、裾部の削平再堆積土中からは、大型の球形胴壺形埴輪、長胴の壺形埴輪、直線的な透かし穴や突帯などの円筒埴輪の細片が僅かに出土する。後円部墳頂の西側縁辺には埴輪細片がまとまる傾向があるため、これらの埴輪は、墳頂平坦面の縁辺に樹立されていたものと見て良いだろう。

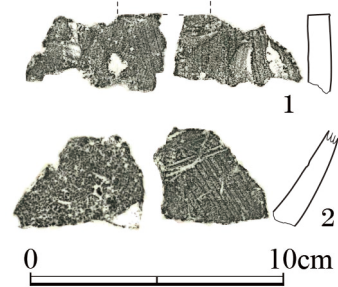


図 2-44 坊主山古墳出土埴輪
(出典：『磯浜古墳群 I』)

(1)-5. 五本松古墳

平成 30 年 8 月、開発前の試掘調査で新発見。現在、国史跡指定地の一角となり保護されている。墳丘は遺存しないが、長軸約 19.7m、短軸約 14.5mの規模を持つ周濠部が検出されている。全形は検出されていないが、前方部～くびれ部の南東側、および前方部の前端をめぐる周濠とみられ、概ね北東-南西軸を持つ 40~50m 級の前方後方墳の可能性が考えられる。周濠内覆土出土遺物は、埴輪は伴わず、後期弥生土器片多数の他、図 2-45 の 1 土師器甕や 2 底部穿孔壺の破片に加え、3 鉄片が含まれた。

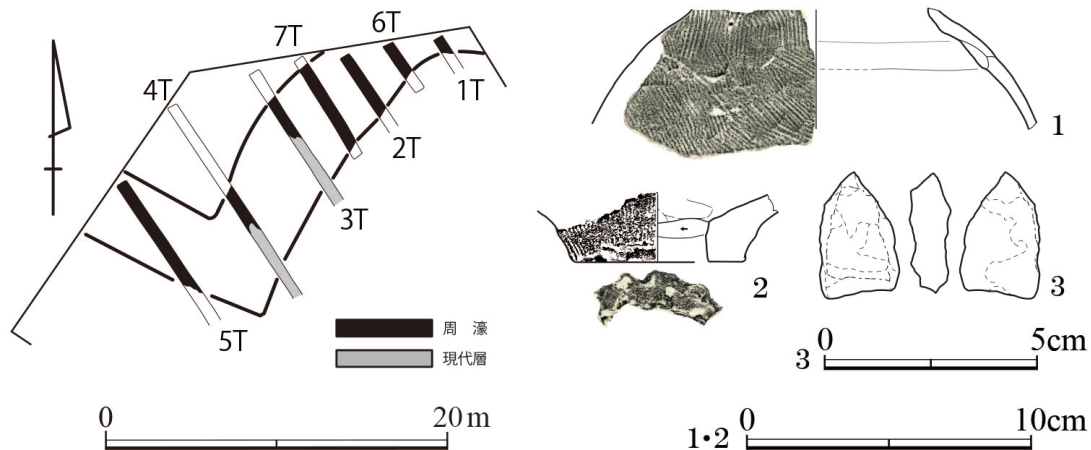


図 2-45 五本松古墳の遺構と遺物 (出典：『磯浜古墳群 I』)

(1)-6. 五本松下古墳

五本松下古墳は、車塚古墳北方の磯浜町 2889 番 1 に所在する保育園「こすもすくーる」

の園内に位置する。園庭に新たに小規模保育所の新規建設が計画されたため、大洗町教育委員会が主体となり、平成31年1月21日～31日までの期間、事前の試掘確認調査を実施した。園庭は平坦であり、古墳に伴う墳丘は残されていない。東西軸と南北軸の2本を設定して調査した結果、幅3.5m前後、確認面からの深さ約1.1mとみられる方形に廻る周濠を検出した。方形周溝墓の可能性も考えられるが、周濠の幅が広いため、20～30m級の小型の前方後方墳（墳丘墓）の可能性も考えられる。

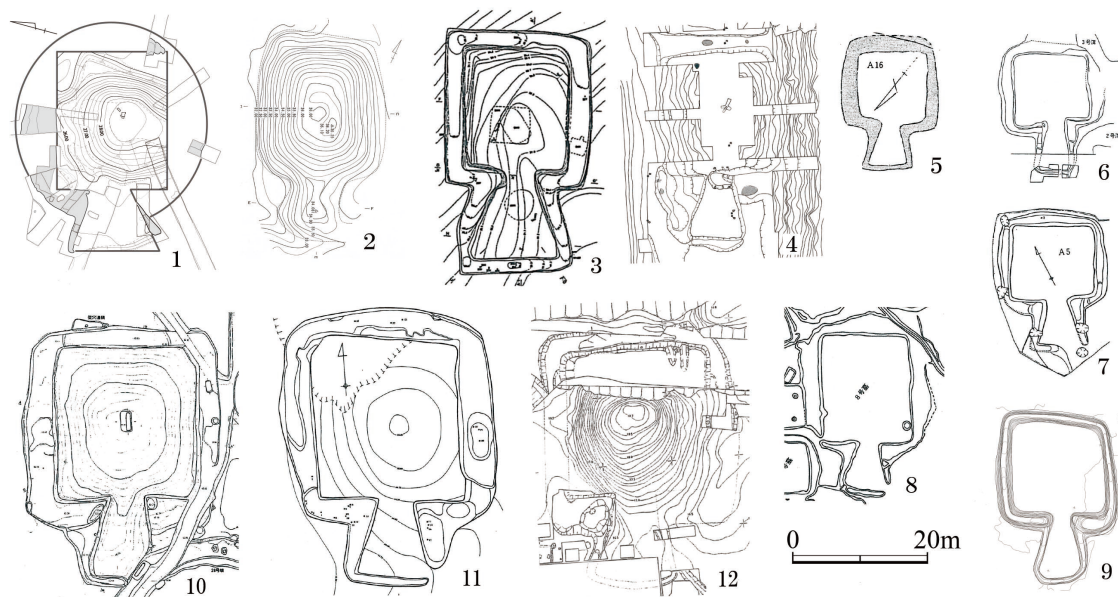
周溝部覆土中の遺物には、埴輪は含まれず、後期弥生土器片多数のほか、下層にも僅かに前期中葉頃の土師器甕頸部片が出土している。

(2)磯浜古墳群の特徴

以上の各古墳の概要を踏まえ、この項では、特筆すべき古墳間の構造や出土遺物の違いに基づく、変遷、年代観について、まとめておきたい。

(2)-1. 構造

姫塚古墳の大きくバチ形に開き狭い周溝が伴う前方部の特徴は、那珂川中下流域を見ても、図2-46の4水戸市安戸星1号墳や同3二の沢B6号墳よりも前出の要素を備えている。



1:姫塚古墳 2:大峰山第1号墳(田口編1983) 3:二の沢B6号周溝墓(江橋・黒澤2003) 4:安戸星1号墳(茂木・堀谷編1982) 5:千葉県調訪台120号墳(市原市文化財センター1988) 6:千葉県戸張一番割遺跡古墳(柏市教育委員会1991) 7:千葉県調訪台33号墳(市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団1975) 8:埼玉県石碓日遺跡8号墳(岡部阿教育委員会2003) 9:福島県稲荷塚6号周溝墓(吉田1995) 10:千葉県高部30号墳(木更津市教育委員会2002) 11:千葉県東間部多2号墳(上総国分寺台遺跡調査団1974) 12:埼玉県権現山2号墳(上福岡市教育委員会2005)

図2-46 姫塚古墳と類例 (出典：『磯浜古墳群Ⅰ』)

今回の調査成果により復元した日下ヶ塚古墳の築造規格を、前末中初の畿内における大王墓等（渋谷向山古墳→佐紀陵山古墳→五社神古墳など）と比較したところ、渋谷向山古墳や五社神古墳では前方部と後円部との比率などの規格がうまく合わず、佐紀陵山古墳の前後比率が良く合い、最も似たシルエットであることが判明してきている（図2-35）。

日下ヶ塚古墳くびれ部東裾における張り出しは、車塚古墳南裾の造出の有無と合わせ、未確定であり、今後に残された課題と言える。五本松古墳や五本松下古墳の墳形の確定も課題として残される。

(2)-2. 出土遺物と変遷

姫塚古墳は、小型丸底鉢の口縁部形態が直下の一本松遺跡第1調査区第82号竪穴建物跡出土土師器甕（図2-47の1～4）と似た特徴を持つ。同住居の廃絶年代は、同図5・6の在り地系の後期弥生土器が主体を占めており、弥生時代終末期、型式名称は十王台式4期から同5期への過渡的な段階頃とみられる。先の流域最初期の前方後墳安戸星1号墳や二の沢B6号墳よりも古い形態的特徴を勘案すると、古墳時代前期初頭、実年代は3世紀後半を中心とした前後の時期になるのではないかと予測する。

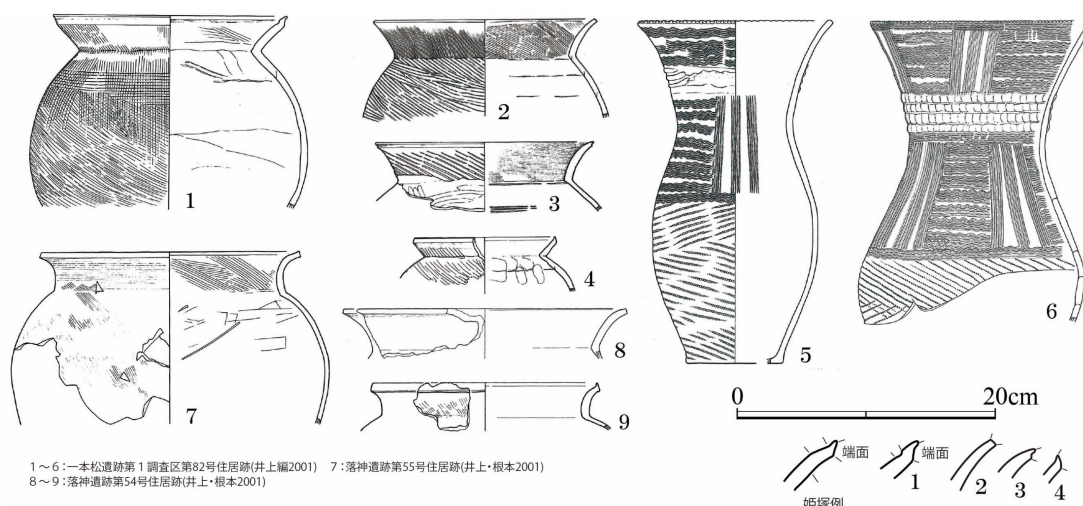


図2-47 姫塚古墳出土遺物の参考資料（出典：『磯浜古墳群Ⅰ』）

日下ヶ塚古墳は、平面形態を中心とした築造規格、および粘土槲内から出土した刀子形石製模造品の形態や技法より、奈良県奈良市北部の佐紀陵山古墳や富雄丸山古墳との関係が予想される。ともに、前期後半、実年代は4世紀後半の古い段階頃に位置づけられている。

日下ヶ塚古墳の年代観を定点として、坊主山古墳について考えた場合、シャープに作られた出土埴輪の特徴から、時期的に並行するか、坊主山古墳がやや先行して築造されるものと考えられるため、前期後半の4世紀中葉～後半の古い段階頃の年代を考慮しておきたい。

五本松古墳、及び五本松下古墳については、時期を明確にできる資料が少なく、今後に残された課題だが、概ね、姫塚古墳と相前後する時期の築造で、前方後円墳+埴輪が入ってくる台地南側の坊主山古墳へ移行する前の前期前半頃とみられる。

車塚古墳については、日下ヶ塚古墳と樹立する埴輪で比較した場合、胎土の特徴や色調は一貫しており、原料土の採取から焼き上げまでの技術系譜は共通するものの、埴輪内面への刷毛目作業の減退、円筒埴輪の方形透孔の数量が4単位から2単位へ減、小円形透孔の採用、あるいは全般的に器壁が厚くなるなど、中期的要素を取り入れながら、生産時期の時間的間

隔が空いていることを示しているものと考えて良い。以上の埴輪の特徴は、日下ヶ塚古墳に車塚古墳が後続することは確かであるから、中期初頭、4世紀後半の新しい段階と考えておきたい。

(3) 磯浜古墳群・埴輪の変遷

(3)-1. 磯浜古墳群の変遷

以上の調査・研究の成果より、磯浜古墳群の変遷については、下記の通り第Ⅰ～Ⅵ期の全6期に分けて考えることができる。図2-48のように簡潔に記述しておく。

第Ⅰ期 弥生時代終末期～古墳時代前期初頭（3世紀後半頃）

同一時期直下に形成される一本松遺跡の集落と関連して、小型の前方後方墳である姫塚古墳を築造する。

第Ⅱ期 古墳時代前期前半（3世紀末～4世紀前半頃）

古墳の形態や詳細な時期は不明であるが、この時期に、埴輪は伴わず底部穿孔壺を持つ、40～50mクラスと大型化した五本松古墳の築造の可能性がある。規模の小さい五本松下古墳もこの時期である。

第Ⅲ期 古墳時代前期後葉（4世紀中～後半の古い段階）

60m級の前方後円墳・坊主山古墳を築造する。出土資料が少なく不明の部分も多いが、円筒埴輪や長壺形埴輪が含まれるから、日下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳と並行、あるいは一時期古い古墳と考えられる。

第Ⅳ期 古墳時代前期末葉（4世紀後半の古い段階）

円筒埴輪や長壺・球形胴壺形埴輪を持つ、100m級の前方後円墳・日下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳を築造する。中央の佐紀陵山古墳と相似墳であり、粘土槨とそこから出土した副葬品は、富雄

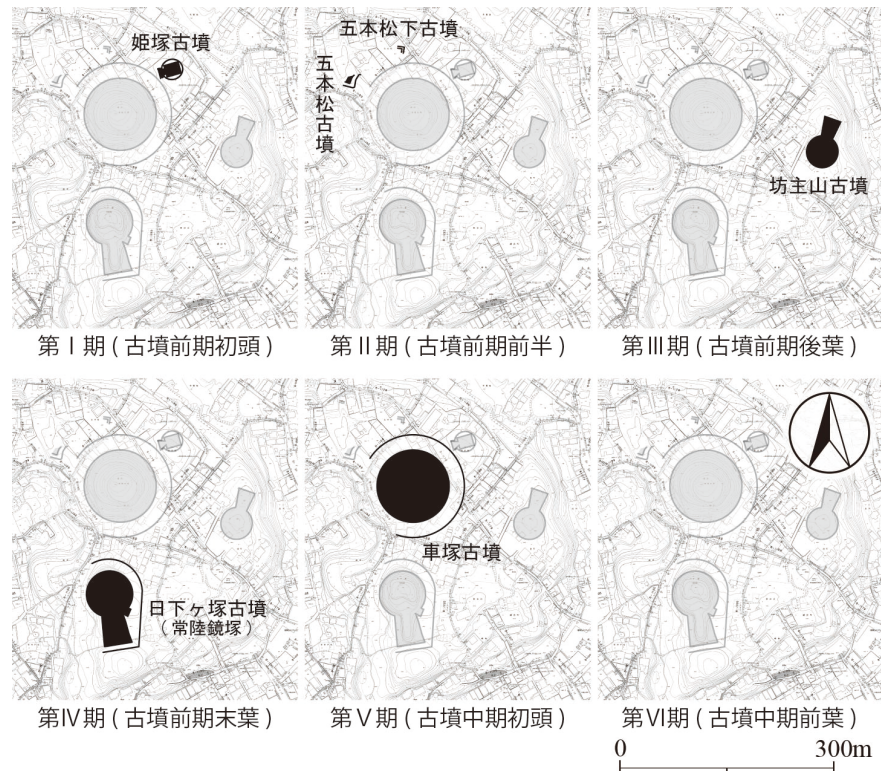


図2-48 磯浜古墳群の変遷（出典：『磯浜古墳群Ⅰ』）

丸山古墳とも並行する時期とみられ特筆される。

第Ⅴ期 古墳時代中期初頭（4世紀後半の新しい段階）

朝顔形・普通円筒埴輪や球形胴壺形埴輪を持つ、80m級の大型円墳・車塚古墳を築造する。主丘で比較すると、60m級の日下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳を凌いでいる。

第Ⅵ期 古墳時代中期前葉（5世紀初頭）

古墳築造が見られなくなり、磯浜の台地に人の痕跡が無くなる。

(3)-2. 埴輪の変遷

磯浜古墳群から出土した埴輪については、長壺形埴輪の変遷を基軸として球形胴壺形埴輪や円筒埴輪も包括して、第Ⅳ期前期末葉の日下ヶ塚(常陸鏡塚)古墳・第Ⅴ期中期初頭の車塚古墳を中心に、その前後の時期である第Ⅲ期前期後葉・第Ⅵ期中期前葉を含め、成立と展開の過程について、時期別に分析しておきたい。

第Ⅲ期 波及した円筒埴輪に影響を受け、球形胴壺の一部が長伸化する。壺作りの流儀で同工人が円筒埴輪を模倣するから、形態的にスケールアップしただけの長頸長胴の壺形埴輪が成立する。胴部中位に最大径を持つのも壺模倣である。図2-49の9長柄・桜山1号墳例や10・11の上出島2号墳例は好例である。厚みは壺の流儀を踏襲するから5～7cmと薄い。また器厚も厚薄がありシャープな印象を持つ。

第Ⅳ期 円筒埴輪の製作技法に立脚して伝統的な長壺形埴輪を製作する。頸部突帯、胴部の伸長・筒化などの要素は、円筒埴輪からの影響である。日下ヶ塚(常陸鏡塚)古墳の長壺1～3類が該当する。12の長壺3類の肩張りは朝顔形円筒埴輪の肩部の張りを模倣したものととも考えられる。厚さは7～9cmと第Ⅲ期よりも厚くなり、厚薄は持つものの、前代よりはシャープさを失っている。変容を遂げる長壺とは別に、伝統的な形態である球形胴壺形埴輪は遺存しており、前方部～括れ部の墳頂部平坦面において、後円部に並べられた新来の円筒埴輪や、主に前方部に樹立された変容した長壺形埴輪と共に、伝統的な埴輪祭祀を司る用具として、前方墳頂部において用いられるようである。

第Ⅴ期 車塚古墳では樹立される埴輪の主体は、定着した朝顔形・普通円筒埴輪となるようであるが、普通円筒と良く似た長壺1類が残る可能性もある。第Ⅳ期の日下ヶ塚(常陸鏡塚)古墳例よりも肉厚となった、末期の球形胴壺形埴輪を用いた祭祀行為が残る。前代の日下ヶ塚(常陸鏡塚)古墳とは、埴形こそ異なるものの、南側の中段という、球形胴壺形埴輪が集中する位置が共通しており、長壺形埴輪と円筒埴輪の主客逆転後も、旧来の球形胴壺形埴輪を用いた埴輪祭祀の伝統が継承されていたと考えられそうである。

第Ⅵ期 磯浜古墳群内は築造が確認できないが、40～50m級の中型の円墳で、8・13～15の長壺2・3類が残る。厚みは10～11mm内外もあり、均一化し、鈍重な印象を与える。胴部の断面形態は、中張りからむしろ下膨れの形態に変化している。長壺1類も常陸沿海で繋がった6の村松権現山古墳で命脈を保つものの、タタキ目を入れており、著しく変容を遂げ、この時期を最後に、長壺形埴輪は作られなくなる。

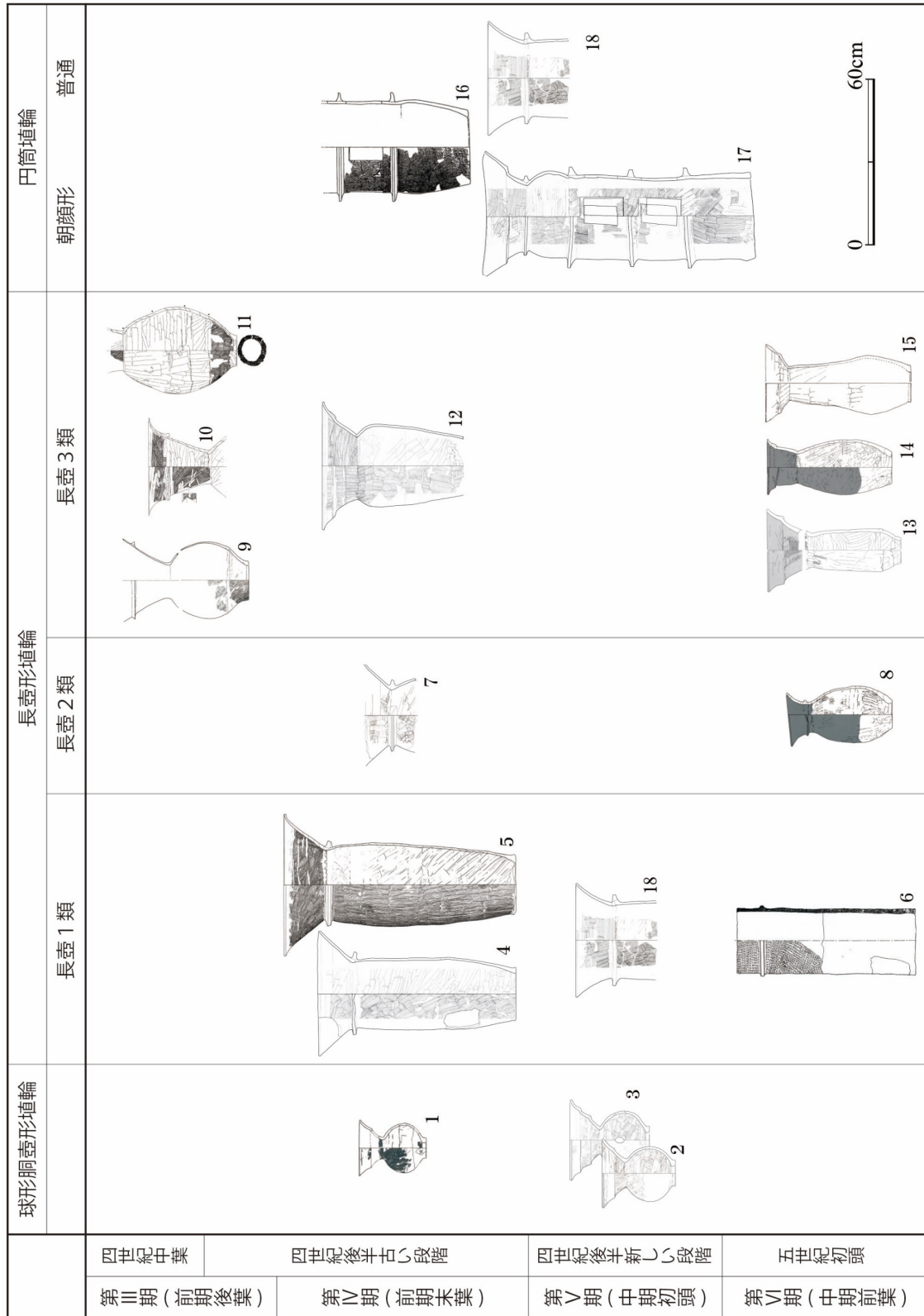


図 2-49 日下ヶ塚古墳・車塚古墳出土埴輪の変遷 (出典：『磯浜古墳群Ⅰ』)